

事業対象としての図書館

— ARG 法人化を踏まえて

アカデミック・リソース・ガイド株式会社
ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) 編集長

岡本真



ARG フォーラムの開催

お盆明けの8月17日、東京・神保町の橋記念講堂は400名以上の聴衆の熱気に満ちていた。聴衆に語りかけるのは、長尾真国立国会図書館長をはじめ、広い意味で「情報」に関わる若手30代の論客3名。「この先にある本のかたち」と題されたこの催しの名は、ARG フォーラム。筆者が編集・発行するインターネット上の学術利用をテーマにしたメールマガジン ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) (以下、ARG) による催しだ。最初に、国立国会図書館が進める大規模デジタル化事業、そしてその先の未来の



一つの形として長尾館長が構想する長尾スキームが語られ、次いで金正勲(慶應義塾大学)、津田大介(ジャーナリスト)、橋本大也(IT起業家)の3氏によって、それぞれが抱く「この先にある本の形」が、語られた。ここでは、ここから始まるARGの新たな展開を述べてみたい。

1998年の創刊以来、すでに11年間、毎回4700部程度の発行を継続し、本誌刊行時には通算400号に達しているARGであるが、これほど大規模な催しを行ったのは初めてだ。大勢の方々にお越しいただき、さらにニュースサイトの記事になったことで、これまで図書館業界や出版業界の外ではそれほど知られていなかった長尾スキームが広く知られるきっかけになったという意味で、このARG フォーラムは一定の成果を取めたと言えるだろう。だが、より重要なことは、1998年の創刊当時は大学を卒業してわずか2年、若く26歳に駆け出し小僧が始めたメディアが、約10年の歳月を経て一定の成熟を果たし、出版・図書館・ウェブのいずれの業界にも等距離の立場で、「この先にある本のかたち」という公共的な議論の場を創り出したことではないかと思う。手前味噌ではあるが、主催者たる自分としては、こう自己評価している。

Yahoo! JAPAN 退職とARG 法人化

ARG フォーラムの開催に先立ち、私自身は1999年から10年間勤務したYahoo! JAPAN を退職した。Yahoo! JAPAN では、前半の5年間をYahoo! カテゴリを編集するサーファードとして、後半の5年間をYahoo! 知恵袋などを企画・設計するプロデューサーとして過ごした。ARG を編集・発行する傍ら、日々躍動するウェブ企業で過ごした10年間は、かけがえない体験を私に与えてくれた。同時に見方によっては余技であるARG を継続できる安定した生活を保障してもらった。だが、ここ数年、特に2005年くらいからだろうか、ARG という活動の幾分かを図書館業界へのコミットに捧げるようになり、その比重が年々増すにつれ、安定の半面としてある活動の制約をしばしば感じるようになっていった。活動に割ける時間という問題以上に、図書館や出版、さらに還元して言えどウェブも含む「情報」や「知識」の世界により広く、より深くコミットしたいという渴望にも近い心理が強まってきたのである。そこで、在職10年を区切りに、Yahoo! JAPAN を去り、活動をARG に一本化することにした。冒頭のARG フォーラムはその皮きりであり、その約一ヶ月後の9月30日には、11年間、個人による任意の活動してきたARG を、アカデミック・リソース・ガイド株式会社へと衣替えしたのである。

ARG 法人化の意図と目的

NPO 法人化という道もある中で、あえて株式会社という形態を選んだ理由の一つは、「事業対象としての図書館」という挑戦を試みたかったからだ。すでに様々な議論のあるところだが、日本において図書館、特に公共図書館は、地方自治体による公共的な事業として営まれている。もちろん、その周辺には本誌の出版者である丸善や、図書館流通センター(TRC)のような企業群が存在している。図書館に関わる事業を営んでいる企業は決して少なくない。だが、ここ数年、ARG が取り組んできたような、図書館やライブラリアンのウェブ活用の促進を事業として営んでいる企業、特にそれを中核としている企業はほぼ見当たらない。

しかし、この1、2年の変化と感じているが、確実に図書館のウェブ活用には進展が見られるようになり、そこには知識と経験、そして見識を備えたライブラリアンが見られるようになってきている。たとえば、茨城県のゆき図書館や、千葉県横芝光町立図書館は、公共図書館の世界におけるトップランナーだろう。ARG としては、従来のような主宰者個人の余技として勤務の合間をぬって、自己反省を含めて述べれば、中途半端に関われる段階を過ぎつつある。そして、その際、一種のボランティア的な要素のある取り組みとしてではなく、自分を含め、志を同じくする人々が、そこできちんとした生活の安定化を、同時にプロフェッショナルとしての満足感を得られるエコシス

テムを確立すべき時期と考えたのである。

定款に記したARGの事業目的は、「1.インターネットサービスの企画、開発、運用」「2.インターネット活用の研修、コンサルティング」「3.ウェブ技術に関わる産官学連携のコンサルティング、仲介」「4.地域社会の活性化に関わるコンサルティング」「5.前各号に附帯する執筆、出版、講演、講義」「6.前各号に附帯する一切の事業」であり、このすべてが図書館業界や出版業界に関わるわけではない。だが、見方によってはいずれの目的も図書館や出版に関わりもするだろう。なぜなら、それほどに図書館や出版は、我々の社会における基本的なインフラであり、その表面的な姿かたちを変え、必要性はなんら変わらないからだ。

法人化前後の取り組み

以上のような考えに立つて、始動した新生ARGであるが、すでに法人化に前後して、いくつかの活動に取り組んでいる。その一つに各地で主に都道府県単位の図書館協会によって行われる研修での講師がある。同様の活動は従来も行ってきたが、講師として招いていたとき、研修参加者にご清聴いただいて終わりという文化講演会的な研修とは一線を画すよう強く意識している。たとえば、この9月、10月には、三重、千葉、岡山で以下の研修講師を担当している。

●9月18日…三重県図書館協会研修会図書館職員専門講座「広報の前提として

のウェブ活用—サイト、ブログ、RSS、Twitterを事例に」

●9月25日…千葉県立中央図書館公共図書館中堅職員研修会「図書館サイトでソーシャル系サービスを使い倒す！ツナガリを育み生かすネットサービスが図書館に与える可能性」

●10月9日…岡山県立図書館図書館職員等研修講座「レファレンスの限界を超えてレファレンスのアーキテクチャーを再設計する」

研修は朝から夕方までと、濃厚な一日を過ごすプログラムになっている。また、単に長時間だけでなく、講師側からの一方向的な講義・講演ではなく、数時間及ぶ討論や実習をプログラムに組み込んでいる。上記の実施例で言えば、三重県の研修では図書館サービスとウェブサービスの連携についての討論、千葉県の場合は、図書館サービスとウェブサービスの連携の試作、岡山県ではレファレンスサービスのあり方を根本的に考え直す討論、とそれぞれのテーマにあわせて全員参加の研修に取り組んでいる。そして、取り組みはその場限りの盛り上がりには留まっていない。事実、千葉県の研修に参加した野田市立図書館は、研修での試作からわずか1週間後には、「野田市立図書館 新着雑誌記事速報」の作成を完了し、公開している。

図書館事業の三面のゴール

このような成果をあげつつ進む新生ARGの図書館事業だが、その三面のゴール

は二つある。一つは、図書館やライブラリが図書館の論理が通用する世界に留まるのではなく、そこから一步踏み出し、広く社会・世界とつながる橋渡しをすることだ。図書館やライブラリは身内の論理に籠ることなく、小さくも偉大な一步を外界に対して踏み出すべきなのだ。

その一つの実践として、この10月29日には、全国図書館大会U40プレミアセツションというものを30名以上の仲間とともに開催した。これは翌10月30日に開催された全国図書館大会に先立ち、日本全国12ヶ所（山形、仙台、新潟、水戸、東京、名古屋、三重、京都、大阪、岡山、福岡、沖縄）で、図書館関係者、特に40歳以下のこれからの図書館を背負って立つ人々が集い、図書館に抱く夢を語り合った同時多発的なイベントである。集ったのは、公共、大学、学校、専門、国立といった、いわゆる館種の壁を超えたライブラリアンであり、さらに図書館に興味や関心、そして期待を

抱く市民ら、実に200名以上。司書資格の有無、雇用形態の差異を問わず、職種、業種といった壁を越えて、各地で図書館の夢が語り合われた。引き続き、このような機会を創り出しそこを一つの起点に図書館の復権・再生を図っていきたい。もう一つのゴールは、図書館に籍を置

かなくても社会で活動できるライブラリアンを生み出すための基盤を築くことだ。料理人の世界、板前の世界では、流しの職人である「流れ板」が存在する。同じように、図書館の世界でも、流しのライブラリアン、流れライブラリアンを生み出したい。ライブラリアンは一般には「図書館員」と呼ばれることが多い。だが、この言葉が示すように図書館に属していない限り、図書館員足りないのだろうか。いや、そうではない。ライブラリアンが真の専門職であるならば、流しても生きていける地位を獲得・確立しなければいけないはずだ。

まだ企画・構想の段階にあるが、具体的に合同会社の一形態であるLLPやLLCという形態で腕に覚えのあるライブラリアンを結集し、あらゆるニーズやリクエストに応える組織を創り上げていきたい。ARGを法人化した理由の一つは、このような夢を形に、理想を現実に変えていくための仕組みとして、株式会社という形態が好ましいと判断したからだ。一人発起人、一人役員、一人社員の小さな小さな会社ではあるが、事業対象として図書館は成立するという希望と期待だけは数限りなく詰め込んで、小さくも偉大な一步を刻んでいきたい。

<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/>



野田市立図書館 新着雑誌記事速報
<http://www.library-noda.jp/homepage/info/magind.html>